天平元年己巳、摂津国の班田の史生丈部龍麻呂自ら経きて死ぬる時に、判官大伴宿禰三中の作る歌一首　并せて短歌

四四三番

天雲の　向伏す国の　もののふと　言はる人は　天皇の
神の御門に　外の重に　立ち候ひ　内の重に　仕へ奉りて
玉葛　いや遠長く　祖の名も　継ぎ行くものと　母父に
妻に子どもに　語らひて　立ちにし日より　たらちねの
母の命は　斎瓮を　前にすゑ置きて　片手には　木綿取り
持ち　片手には　和たへ奉り　平けく　ま幸くませと
天地の　神を乞ひ禱み　いかにあらむ　年月日にか　つつ
じ花　にほへる君が　にほ鳥の　なづさひ来むと　立ちて
居て　待ちけむ人は　大君の　命恐み　おし照る　難波
の国に　あらたまの　年経るまでに　白たへの　衣干さ
ず　朝夕に　ありつる君は　いかさまに　思ひいませか
うつせみの　惜しきこの世を　露霜の　置きて去にけむ
時にあらずして

反歌

四四四番

昨日こそ　君はありしか　思はぬに　浜松の上に　雲にた
なびく

四四五番

何時しかと　待つらむ妹に　玉梓の　言だに告げず　去に
し君かも